

Title	堀江英一著 明治維新の社会構造
Sub Title	
Author	尾城, 太郎丸
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.3 (1955. 3) ,p.254(70)- 257(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19550301-0070
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

並にこれによつて作用される所得効果の分析にまで展開し得ないのはこのためであらう。しかし本書は後進國開發理論に新たな解度を与えたものとして注目されなければならない。

(白石 著)

堀江英一著

『明治維新の社會構造』

「封建社會における資本の存在形態」(社會構成史體系所収、昭和廿四年刊)が發表されてから、幕末維新史論争を語るものは、常に堀江英一氏の名を「小營業段階説」と結びつけて考えて来た。しかし、氏の本来の意圖は、單に「幕末維新时期がマニユファチュアであるか小營業であるかという經濟發展段階の側面からだけ」でなく「それよりもはるかに廣い觀點」すなわち「マニユファクチュア段階はブルジョア革命期の階級闘争を規定し、小營業段階は絶対主義形成期の階級闘争を規定する」という見地から、「特定の階級闘争、政治闘争を規定する經濟の規定」として、幕末の經濟發展段階をとりあげることにあつたのである。(引用箇所は本書はしがき)それ故、氏は、「絶対主義については、……その構造的的分析に重點がおかれ、それが現實に成立して來る具體的歴史的過程、とくに第二段階の封建國家體制の全面的な自己運動の歸結として絶対主義の成立を研究することがおろそかにされている」(本書二〇九頁、歴史研究會編「國家權力の諸段階」八〇頁)という石母田正氏の指摘に應えて、今までの構造分析の成果を前提した上で、經濟過程の變化が階級闘争とりわけ農民一揆の性格をどのように規定し、明治維新の主體勢力がそのなかからいかにして生れるかを、本書のなかで追求している。

本書の分析視角を述べた第一章において、氏は、明治維新の政治變革の基礎としての階級關係の變更を明確に規定することが明治維新史研究の中心課題であると見做し、「徳川幕藩體制から絶対主義天皇制への政治的變革の基礎をなしている基本矛盾は基本的な階級對立がどう變つたか(又どのような矛盾をどのように解決したか)」(本書二頁)という問題設定を試みる。そして、この問題に對する結論的見透しは既に第一章の中で與えられていたが、本書全體の構成から見れば、第二、三章において、幕末の尊攘討幕運動から絶対主義天皇制の確立に至る政治的諸變革の指導的勢力となつたものがいかなる階級であり、又この變革の背景として農民一揆の中にあつたかがあきらかにされ、以上の歴史過程に對する經濟規定として、第四、五章において、商品經濟の展開をめぐる領主と農民との對抗關係から、農民的土地所有の前進にも拘らず、領主的反動による農民の商品經濟の分裂による寄生地的土地所有が成立し、これを物質的基礎とする絶対主義半封建體制—維新變革の成果—の基礎構造、基本矛盾があきらかにされている。

ところで、氏が分析視角の中心に据えた「階級關係の變更」とは何であるか。これを明確に把握するため、氏は徳川幕藩體制(純粹封建體制)の諸矛盾を基本矛盾と從屬矛盾とに分け、幕藩領主と農民階級との對立—矛盾が基本矛盾—基本的階級對立であり、農民階級内部の矛盾すなわち農民の中の村落支配者層—上級農民層(いわゆる「豪農」)—と一般農民層との對立が從屬矛盾であるとみる。そして、この幕藩體制における基本矛盾が解決されて從屬矛盾が今や基本矛盾に轉化して來るのが維新變革による「階級關係の變更」そのものであるが、その歴史的内容はどうなるのかといへば、元祿享保期以降の農民の商品

經濟の展開とそれに基づく封建的危機の深化過程の中で、次第に激化して來る農民一揆には、農民階級全體が幕藩領主に反抗する惣百姓一揆とならんで、村落支配者層の打毀しを伴う一般農民層の世直し一揆が見られるが、徳川期全體を通じての支配的な形態は前者惣百姓一揆形態であること、しかしながら、幕末維新に近づくにつれ、先進地帯から後進地帯へかけて、一般農民層の世直し一揆の力が強くなり、天保八年の大鹽黨の一揆をはじめ上層農民の指導する惣百姓一揆は、明治十五年の福島事件をはじめとする農民運動を最後に歴史の後景に退き、これに代つて明治十七年の秩父事件に代表される一般農民層と村落支配者層との對立が歴史の前景に出來るといふ變化である。こうした基本關係は維新變革をめぐる政治運動の性格をも規定して來る。すなわち、幕末維新の尊攘討幕運動の階級的基礎はやはり惣百姓一揆を指導した農村支配者層であり、かれらが領主的支配者層の中に反領主運動の同盟者を見出し得たか否かが維新運動の成否を決する鍵であつた。換言すれば、幕藩領主—豪農—一般農民のラインに對して尊攘派志士—豪農—一般農民のラインが維新變革への道であつた。(藤田五郎氏の豪農の領主への連繫説の批判)しかも、農村支配者層—豪農を反領主運動へ向させたのは、外ならぬ世直し一揆—一般農民層のかれら自身に對する反抗の壓力であり、反領主運動の成否は、最も革命的な世直し一揆の指導者であつた小ブルジョアの中農層がこの運動を支持するか否かにかかつていた。(奈良本辰也氏の郷土中農層論批判)このような農民階級間の階級關係をあらわにすることに、維新政治史と維新經濟史とが結びつけられるとする。(林基氏の農民一揆の戰術論批判)

て、元祿享保期以降の封建的危機の經濟的基礎であつた商品經濟の全國的展開及びこれをめぐる領主と農民との對抗關係、更なるなかから成長して來るブルジョアの生産關係の形態、すなわち封建社會における資本の存在形態の分析という形で展開された部分であるが、本書では前記歴史過程の分析に照應して、より發展的に説明されている。すなわち、舊著において單に小商品生産—小營業の發展として把握されていたものが、ここでは農民の經濟的發展から、幕藩領主的土地所有に對抗する「農民的土地所有」の前進と規定され、維新變革はこの農民的土地所有の勝利を意味していたとされる。(地租改正による法的確認のことは、幕藩體制の封建的危機—直接には生産物地代原則の崩壊—の背後に、直接生産者—農民の手における胎芽的利潤の増大がかくされておられ、この胎芽的利潤の轉化形態がかの新地主の作徳米であり、維新體制の物質的基礎となつた「寄生地主的土地所有」も實は農民的土地所有の轉化形態であり、かかる意味でそれはブルジョアの發展の所産なのであつた。そしてこの寄生地主的土地所有の成立に關しては、農民層の分層について、畿内棉作地帯における中農層の上昇と天保期の挫折を通じて寄生地主の成立を説明しようとする最近の研究(末戸田四郎—幕末水戸藩における商品生産の發展と中農層—東北大學經濟學部研究年報經濟學二二號)を高く評價され、この中農層の上昇の挫折・分層については、天保期前後からはじまる地主手作の危機と解體がその背景にあり、この原因としては、農民の商品經濟に對する領主的對應すなわち株仲間統制による價格面を通じての農業經營(とくに棉作)への壓迫の役割が大きかつたとされる。ところで、この寄生地主はさきの村落支配者層—豪農であり、商品經濟による農民層の分層の中からかかる寄生地主的土地所有が生れたといふことは、封建的危機に對する領主的

書評及び紹介

反動(さきの株仲間統制をはじめとする諸政策)を媒介として農民的商品經濟、そのブルジョア的發展が分裂せしめられたことを意味する。

そしてかかる分裂政策は、農村支配者層(上層農民)の特權化、領主的コースへの編入という形で幕末期にあらわれて来るが、明治以後とくに十四年の政變以降になつて新しいより明確な形をとる。すなわち、明治十四年以降の政府の財政經濟政策は、特權的政商資本の工場資本への轉化を保護育成したばかりでなく、地方農村におけるかつての村落支配者層(寄生地主マニユファクチュア)を貧農一般農民層(小作人IIプロレタリアート)から保護し特權化せしめることとなり、「上から」の國會開設によつて板垣のいわゆる「豪家ノ農商」の國政への參加の道を開いて、かれらの專制政府に對する攻撃を挫折せしめる役割を果たした。

かくして、舊幕藩體制の領主的土村所有に代る農民的土地所有(その内容は寄生地主的土地所有)を物質的基礎とし、「豪家ノ農商」を階級的基礎とする絶對主義天皇制が確立するのであつた。

以上を要するに、明治維新(氏は、この時期を天保八年から明治一七年又は二二年までとする)の政治過程は、維新の主體勢力たる村落支配者層が惣百姓一揆を通じて國家權力の中へ進出して行く過程であつて(これに應じて權力の性格は純粹封建的なものから絶對主義的なものへと變化して行く)、それ故、さきの小營業段階はこの絶對主義形成期の農民闘争の形態たる惣百姓一揆を規定する經濟規定であつたのである。

本書の發表によつて、堀江氏の從來の見解を經濟主義とする批判は最早當らぬものとなつたといえよう。とくに毛澤東の矛盾論の適用によつて、今までとかく不明確であつた幕藩體制の

諸矛盾が見事に整理され、藤田五郎氏などに見られた三つの階級關係という平面的な見解は、これによつて完全に克服された。又經濟規定の面についても、「農民的土地所有」範疇の大膽な適用によつて、寄生地主制の半封建性の積極的な解明が意圖され、豪農に對立する一般農民層の中から、嚴密な意味での「中農層」についての意義と役割に注目されている等、いわゆる「二つの途」の問題はより發展的に取扱われている。

しかしその反面、残された問題もまた幾つかある。例えば、階級關係の變更、矛盾の位置の轉換によつて成立した維新體制の矛盾の構造(これは第六章の第三節に明示されている)が、この體制の下で確立する日本資本主義の諸矛盾とどのようになるのであろうか、この點はたしかに本書の領域外の問題であらうが、維新史研究にとつては残された大きな課題である。又、矛盾の側面をなす諸階層、とくに村落支配者層や一般農民層(とりわけ中農層)の性格規定が積極的になされていないため、今までいわれる構造分析の觀點からのみこの規定を行つていた一般の方法が何故、又いかに改められねばならないか、この邊明瞭でない憾みがある。更に、農民層の分解における中農層の問題については、天保期におけるその上昇の挫折・分解が地主手作の解體の中で論ぜられているが、この地主手作が古い農奴主經營的性格のものであるとすれば、このような性格は中農層の場合にはどうなるのであろうか。又村落支配者層の性格規定に關連して、本書では「寄生地主IIマニユファクチュア」なる範疇が、フランスの場合の「市民的土地所有」の事例を論據として、極めて當然のものとして前提されているが、果してこのような「型」、範疇が何故成立し得るのか、この問題も今までの構造分析の制約をはなれて考えねばならぬ問題である。とはいへ、明治維新史研究における本書の意義は舊著「存在

形態」のそれに劣らず大きなものといわねばならない。(有斐閣、二二二頁、昭和二十九年九月二十五日、A5版、三〇〇圓) (尾城 太郎丸)

久留間健造 著 玉野井芳郎 著 『經濟學史』

さいきんの日本の經濟學界のあたらしい傾向の一つとして經濟學史の研究がさかんとなつてきたことがあげられるであろう。いまそのうちから注目すべき著作としてつぎのものをあげたい。

出口勇藏氏編『經濟學史』(昭和二十八年、ミネルヴァ書房) 内田義彦氏著『經濟學の生誕』(昭和二十八年、未來社) 水田洋氏著『近代人の形成』(昭和二十九年、東京大學出版會) 水田洋氏著『アダム・スミス研究入門』(昭和二十九年、未來社)

高島善哉氏編『古典學派の成立』(昭和二十九年、河出書房、『經濟學全集』第二卷)

さいこの書物は、私自身も執筆者の一人なのでここに掲げるのをいささかちゆうちよしたがるが、私の論稿は別として、日本におけるスミス研究の水準を示すものとして、またスミス研究の問題意識の所在を示すものとして、充分に注目にあたいたると思ふ。

そしていまここに紹介の對象とする久留間、玉野井兩氏の共著『經濟學史』も日本における經濟學史の在り方について反省のいとぐちをあたえるものとして注目されてよい。著者たちのはしがきによれば、本書は、マルクスに先行する經濟學の歴史を對象として、科學としての經濟學の發展の大筋を、その主流

書評及び紹介

に即してできるだけ正確に描出しようとしたものである。ここで主流といわれているものは、(第一章)「概説」において資本主義の發展に照應して區分された經濟學の段階にしたがつてケネーによつて代表される「フイジオクラシー」(第二章)、スミスおよびリカードによつて代表される「古典學派」(第三章)、マルサス、トレンズ、ペイリー、J・ミルによつて代表される「古典學派の解體」(第四章)、さいごにホジスキンス、ラムジイ、ジョーンズによつて代表される「古典學派からマルクスへの過渡」(第五章)である。このうち第一章、第二章および第三章を久留間氏が擔當され、第四章、第五章を玉野井氏が擔當されている。久留間氏の執筆部分は同氏の舊著『經濟學史』(昭和二十三年、河出書房)を加筆されたものである。また玉野井氏の執筆の主要部分は同氏の著書『リカードからマルクスへ』(昭和二十九年、新評論社)をさらに要約されたものとみられる。そういう意味で本書は充分の準備と検討を経たいわば手堅い著作である。

本書であつかわれる時代は前述の如くフイジオクラシーからマルクスのあらわれる以前までであるが、あつかわれる問題は主として價值論である。くわしくいへば、價值論、剩餘價值論、生産價格論である。だから本書は實質的に名づければ、一長洲一二氏の適切にいわれているように『思想』昭和二十九年一月號)「イギリス古典派價值論史」である。これからただちに類推されることは、本書がマルクスの『剩餘價值論』全三巻に依據しているということである。じつさい、内容をみれば、『剩餘價值論』に極めて忠實に依據して、同一の問題を追求していることがわかる。たとえば、第三章の古典學派の部分では、『剩餘價值論』の第一、二巻におけるスミス、リカード批判にしたがつて、價值論の基本命題が分析された